

霊力の観念 : 比較論的覚書

吉田, 禎吾

<https://doi.org/10.15017/2340945>

出版情報 : 九州人類学会報. 30, pp.17-26, 2003-07-05. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :

【寄稿論文】

— 霊力の観念—比較論的覚書—

吉田 禎吾

1953年の冬、私が九州大学教育学部比較教育文化施設（比研）に赴任したころには¹⁾、まだ日本の多くの大学には文化人類学は市民権を持たなかった²⁾。九州人類学研究会の“先史時代”に当初、文化人類学は私一人であったので、文化人類学に関連する分野の社会学、自然人類学、宗教学の方々にご協力いただき、ESA (Ethnology, Sociology, Anthropology) の頭文字をとつ

たもの) 会と称する学部を超えたインフォーマルな研究会を一緒に作った（この研究会は私が九大を去るまで続いた）。ご参加いただいたのは、内藤莞爾、永井昌文、吉町義夫、石井次郎、野村伸清、有地亨、三隅ニ不ニなどの諸先生である。討議はとどまることなく、3、4人で中州に席を移して議論を続けたこともよくあった。

私の赴任した当時、古野清人先生が図書

館長をしておられ、時々館長室を図々しく訪れて教を仰いだ。九大に行く前に、東京学芸大学に在職中、最初のガリオア留学生の一人として1949年に進駐軍の船で10日もかかってアメリカに渡り、オレゴン大学に学んだが、人類学の授業でフランスのデュルケム学派の業績を扱うことはほとんどなかった。アメリカの文化人類学がフランスの知的遺産を認めない傾向はその後も続き、最近の文化人類学教科書でも同様である(桑山 2001)。シュルツとラヴェンダの教科書 [Shultz & Lavenda [第3版] 1995] においてもデュルケムについては1行(アノミーについて)述べているに過ぎず、モースについては全く触れていない。東京大学在学中、心理学を専攻したが、社会や文化の研究にはデュルケム学派の伝統が重要であると今も信じている。私がアメリカに留学したころは、文化とパーソナリティの研究が一部で盛んであったが、私はこれにははじめなかった。一例を挙げる。1960年代の初め、ニーダムは『構造と感情』の中で、母方交叉イトコ婚が優先される習慣に関するホーマンズとシュナイダーの心理的解釈が多くの民族誌の事実に妥当しないことを明らかにし、レヴィ=ストロースの構造分析を支持した [Needham 1962]。この本は今でも重要な文献の一つである。

1950年代は、海外に調査に行くことはまだ困難であり、その代り九州、四国、山陰での村落調査に力を注ぐことができた。文化人類学を一人で教えることは不可能であったので、助手と関心のある学生と共同で調査を行なうことにより、データをどう獲得し解釈するかを一緒に考えていく方法をとった。15年間の九大在職中、Clyde Kluckhohn, Bernard J. Siegel, John L. Fischer, Francis L. K. Hsu, Thomas P. Rohlen などの人類学者が講演や研究のために比研を訪れたことを記しておきたい。

私はこの拙論を失われた時を求めた回想録にする気はなく、ここで最近考えていることの一部を述べたい。

I. フィールドと視点の問題

周知のように、フィールドワークを文化人類学に確立したマリノフスキー以来、フィールドワークは人類学で重要な位置を占めてきた。ただフィールドワークと言っても、決して簡単ではない。フィールドで何を見、何を聞き、何を重要だと思うのは、その人の関心の如何によって内容は著しく違ってくる。その人が何を読み、何を読まなかったか、知的準備の違いによって蓄積されるデータも違う。そういう要因を無視したフィールドワークの尊重は戒めなければならない。ニコラス・アレンが「私が反対なのは、フィールドワークを盲目的に崇拜し(fetishing)、これを誇張することであり、これを人類学の本質と見なすことである」と述べている通りである。アレンは続けて、民族誌(そして人類学)はフィールドワーク以上のものであり、われわれは生のデータを叙述し、分析し、解釈する。これを行うための思考全体が社会人類学の特徴なのであり、フィールドワークだけではない。人類学のもう一つの方法は比較研究であり、これによって社会文化的現象を共時的、通時的(歴史的)に理解することを目指すという。この論文の末尾で、アレンは、マリノフスキーの追随者だけでなく、興味や適正からモースの方に向かう学生にも門戸を開けておく必要があると記している [Allen 2000b]。一般にモースは社会学者というイメージが強いが、ジョルジュ・コンドミナスはモースを「フランス民族誌学の父(le père de l'ethnographie française)」としており [Condominas 1972]、彼をフランス社会人類学の父と呼んでもいいだろう。

モースはギリシア・ローマ古典、古代インドの文献に通じており、当時の世界中の民族誌、民族学、人類学関係の著書に関する該博な知識は驚くべきである。彼の時代からして当然モースに批判されるべき点はあるが、今でもモースから学ぶところが少なくないと私は最近思っている。ついでに彼のマリノフスキーに関する印象に一言触れると、マリノフスキーの偉大な業績を評価しているかたわら「彼（マリノフスキー）の理論的な弱さと学識（*érudition*）の欠如はやがて明らかになるだろう」と書簡の中で述べている [Fournier 1994 : 637 ; 637, n. 1]。

私が九大在職中に九州、四国、山陰地方で村落調査を行なったお陰で、後にバリを調査した時、最初に気づいたことの一つは、集団の作り方が日本の村落の場合と非常に異なることであった。日本では、地域集団の最小単位である部落を基にした集団の重層性が強いが、同じ水稻耕作を行ってきたバリ村落で日本の部落にあたるバンジャールは、水利組合その他の集団は原則として異なるバンジャールの成員から構成されている。つまりバリの社会組織は、日本とは違って各集団が重ならず互いに交錯するパターンをなしている。

われわれが異文化を研究する場合、自ら日本人の文化的なバイヤスを考慮にいたした観察や解釈が必要である。西洋の人類学者による民族誌に西洋文化の視点を意識せずに西洋中心的な解釈がなされている場合が少なくないことは、最近指摘されている通りである。例えば、エリアーデのかかげたシャーマニズムの原型は、事実に基づくというよりも西洋的思考によって架空に構築されたものだったのである [Wallis 2002 : 740]。民族誌に西洋文化に基づく誤解があるという指摘ははるか以前にもある。例えば、ツングース族のシャーマニズムの

研究で知られるシロコゴロフは、1935年の著書で、ツングース族には“soul”という概念は無いにもかかわらず、当時のヨーロッパ人によるツングース族の民族誌に“soul”という語が使われているものがあり、これは西洋の世界観に基づくヨーロッパ人の誤解であると述べている [Shirokogoroff 1935 : 54, 125ff.]。

II. バリ島のシャーマンと靈力

バリ島のサドゥグ (*sadeg*) といわれるシャーマンは、神、祖霊などの靈格に憑依され、占いや病氣治療を行う。以前、南バリである女性サドゥグを訪れた時、サドゥグが庭の東方に向かって拝んでいる社の中に牙を誇張したムチャリン神の石像があるのを見て不思議に思った。ムチャリンは疫病をバリに流行らせに毎年雨季の初めにやってくる恐ろしい神であるにも拘わらず、この神を人の病気を治し災いを取り除くサドゥグが何故祀るのが理解できなかったからである。

ラトゥ・グデ・ムチャリン (*Ratu Gede Macaling* 「大きい牙を生やした神の意」) は、バリ島南東部のヌサ・プニダ (ヌサは島の意) という小島にいとされる³⁾。

ムチャリンは、バリの陰陽暦である「サカ暦」の5月の最終日「ティルム」(月の出ない日)——西暦11月～12月に当たり、雨季の初めである——に従者を連れて疫病をバリ島に撒き散らしにやってくる恐ろしい神である。ムチャリンらはバリに上陸し、コレラを流行らせ、他の島々を回り、4ヶ月目のサカ暦9月の最終日「ティルム」にヌサ・プニダに戻ると言われる。ムチャリンはバリにきてから帰る時までコレラをはやらせる。オランダの軍艦が1881年にバリに達した後、コレラがバリに蔓延したらしい。西洋の軍艦がバリに現れた後にコレラが流行るこ

とが違う年に2回あった。19世紀に外部からバリに齎されたコレラはムチャリン神と結びつき、これらをめぐる観念、信仰、儀礼が新しく生まれたのである [Lovric 1987]⁴⁾。

1991年にバリを再訪した時に尋ねたジェロ・ダサールというサドゥグは守護神をムチャリン神にしているのにも驚かされた [吉田 1996]。バリ人の説明によると、ムチャリン神は「サクティ」(sakti)が強いので、疫病を流行らせる恐ろしい神だが、病気を治す力が非常に強いという。

サクティとう語はサンスクリットのサクティ (sakti) に由来し、「神の活力」を指す。バリでサクティは「霊力」、「神秘的な力」を意味する [Hobart 1985 : 21 ; Wikan 1990 : 241-246]。さらに神々、歴代の王、祭司ブラーフマナ、鍛冶屋、儀礼に用いる仮面、古来の文書、神聖な場所などもサクティである [Geertz 1980 : 106 ; 小泉訳 : 125 ; Guermonprez 1987 : 26, 188, 254]⁴⁾。ムチャリン神に内在するとされるサクティのように、サクティは人を病気にさせる悪なる力であるとともに、病気を治す力であり、善なる力でもあると信じられており、ヨーロッパの世界観に内在している善と悪の峻別、二項対立は、バリ人の思考とは異質のものである。

サクティであるとされるバリアン (balian) は、呪術や薬草などによって病気治療を行うが、サクティによって人に危害を与えることができると信じられているために、人々に恐れられている。サクティは、日常生活でサクティの効果、威力を目の当たりにするという意味では、顕在的世界「スカラ」に属し、この世のものであるが、それが神、先祖、邪術の力として捉えられるとき、サクティは潜在的な世界「ニスカラ」に属している [Wikan 1990 : 243]。ギアツはサクティを超日常的現象として捉えてい

るが [Geertz 1980 : 106]⁵⁾、バリ人にとって、サクティは必ずしも超日常的現象ではない。またバリのスカラ・ニスカラという区分は西洋の自然と超自然という区分とは異なる。表現されない人間の感情や未来に起きる出来事もニスカラに含まれ、見えるようになれば、それはスカラになるからである [Hobart 1985 : 112 ; Barth 1993 : 192 ; Vickers 1991 : 109 ; H. Geertz 1991 : 109, 184]。

そこで次にバリ島民のサクティの概念はバリに固有のものか、或いは他の民族誌に類似の概念があるか否かについて考えてみたい。私はバリのサクティの概念はオセアニアその他におけるマナの観念に似ているのではないかと考える。この類似性についてはすでにブーンやギアツが指摘している [Boon 1977 : 111-112 ; Geertz 1980 : 106 ; 小泉訳 : 125]。ブーンは、サクティはポリネシアのマナや、マレー地方のクラマツトに当たり、バリにはある面で部族的なポリネシア社会に似たところがあると論じている [Boon 1977 : 111-2, 204]。そこでオセアニアその他のマナについて簡単に述べたい。

III. マナと王権

現在でも、「マナ」の理解なしには、ポリネシアの世界観は分らないとされる [Shore 1987 : 137]。「マナ」という語を宗教的観念として最初に記述したとされるコドリントンによれば、メラネシアでマナは「超自然的な力」を意味し、これを持つ人間は卓越した仕事を達成するとされ、成功した人間はマナを持っている証拠である。そしてマナは良い目的にも悪い目的にも作用する力の信仰である [Codrington 1891 : 118~120 ; Goldman 1970 : 10]。

モースは、メラネシアのマナに類似の観

念が、マレー地方や北アメリカ先住民にも見出されると論じた [Mauss 1950 : 1-141 有地 亨ほか訳1973、第1巻 : 47-217]⁶⁾。マナは霊的な力だけでなく、物質や行為でもあり、名詞、形容詞、動詞である。マレー地方では 霊力を持つ物質、場所、動物、特定の間人、妖術師はクラマツト (kramat) であり、或いはクラマツトを持つとされる。クラマツト (アラビア語に由来する語) は、オセアニアのマナに相当する観念である [Endicott 1970]。北アメリカ先住民諸族のオレンダ (orenda)、マニトウ (manitou)、ワカン (wakan) の観念がマナに相当する [Mauss 1950 : 101-109]。

ゴールドマンは、ポリネシアのマナについては、コドリントンのマナの定義をそのまま活用している [Goldman 1970 : 10-13]。またハワイの先住民に関して、ヴァレリは、コドリントンらが明らかにしたメラネシアのマナ観念がハワイに妥当するかどうかを検討し、ポリネシアに関する新しい民族誌がコドリントンのマナ概念の正しさを実証していると述べている [Valeri 1985 : 95-101]。従ってマドソントンに関するキーピングの批判は当たらない [Keesing 1984]。

サクティはバリ語の諸辞書によると、名詞、形容詞として使われ、霊力、物質、活動であり、マナのように動詞に使われることはないが [Barber 1979 ; Kersten BVD 1984, など]、サクティは基本的にはマレー地方のクラマツトやオセアニアのマナにほぼ相当すると考えてよいだろう。

さらにバリ以外のインドネシア諸民族においても、サクティやマナに当る観念が見られる。バタック族のサハラ (sahala)、ニアス島住民のエヘハ (eheha)、トラジャ族のラモア (lamo) の観念はマナに当り、スマトラのミナンカバウやジャワ人も霊力の存在を信じている [Stohr & Zoetwulder

1968 : 212-213, 216 ; Koentjaraningrat, ed. 1971 : 115, 259, 346 ; 加藤ほか訳 1980 : 144, 307, 416]。カリマンタンのガジュ・ダイヤック族のオントン (ontong) という語もマナに当る [Schärer 1963 : 121]。

ホカートによれば、ポリネシアでは、首長や王はマナを保有しているので奇跡を行うことができるとされている。さらに王は神秘的な形で作物に影響を与えると信じられている。同じことはメラネシア、マレー地方の王にも見られる。王が神秘的な形で作物に影響を与えるという信仰はオーストロネシア語族⁷⁾に限らない [Hocart 1969 [1927] : 33-34]。植民地以前のバリの王はサクティを保有しているとされていた。ジャワの歴代の王も同様な霊力を持っていると信じられていた [Anderson 1972 : 17]。このような観念はビルマやカンボジャなどにもあった [Heine-Gerdern 1942]。王の霊力の観念は、祭司王としてフレイザーの『金枝編』のテーマである。M.フォーテスは、「真剣な人類学者なら誰でもフレイザーの著作に戻っていく」と述べているが [Fortes 1959 : 1]、ここでは神聖王の問題には立ち入らずに、バリとオセアニアとの文化的類似性の問題に戻りたい。似ているのはサクティとマナに限らない。バリの寺院はポリネシアの聖地に似たところがあるし [Swellengrebel 1960 : 28]、ギアツもバリがポリネシアの社会政治的秩序に似ている点にふれている [Geertz 1980 : 239]。

バリのコスモロジーにはカジャ (kaja) 「山の方」とクロド (kelod) 「海の方」の対立が際立っている [吉田 1975]。ポリネシアのマーケサス諸島で「フィティ (fiti)」は「山の方」「日のでる東方」を意味し、「ヘエ (hee)」は「海の方」「日の沈む西方」を指す [Handy 1927 : 37]。なお東西の方位観は、沖縄では東を「アガリ」、西を「イリ」

と呼ぶし、メキシコ南部高地の先住民シナカンタンやチャムラにおいても、東を「日の昇る処」として尊重し、西を「日の沈む」として悪い方位としている（吉田 1983：202）。こういう方位観は一層広く見られる。

ところでギアツヤダフ＝クーパーによると、植民地時代以前のバリでは、王は法的、行政的な面で統治を行い、プラーフマナ（最高祭司）は儀礼を司っていたという点で、バリの王国は一種の二重王制ないし二重主権の形態をとっていた [Geertz 1980：60-61, 165；Duff-Cooper 1988]。カニンガムは、ティモール島のアトニ族でも、主権は二分され、一方に「世俗的統治者」、他方に「神聖な統治者」がいると論じている [Cunningham 1965]。

オセアニアではどうであろうか。ホカートによれば、メラネシアのフィジー島では、各部族に二人のチーフがいるのが普通で、これは Tui（王の意）と言われる「年長首長」と、Sau（繁栄の意）と言われる「年少首長」である。「年少首長」は「活動的」で「戦の神」として戦争を指揮するのに対し、「年長首長」は「静か」で「年少首長」よりも聖性が強い。政治的紛争を経て「年少首長」が「年長首長」を追放し、強力な王になった場合もある。ニューギニアでも、首長は「右の首長」と「左の首長」に分かれ、「左の首長」が戦の首長であり、「右の首長」は戦を止め、平和を齎す首長である [Hocart 1970 [1936]：163-165]。

ハワイ諸島にも二重主権が存在した。それは、一方で、生まれは卑しいが、活動的で、戦に強い王と、他方は高貴な血筋に生まれ、祭司を兼ねる平和な王からなる。或いは、一方の王は傲慢で残忍な王であり、他方の王は強力な征服者であって、民衆に愛される王であるケースもある。または二人の王が兄弟であったり、父子であったりする。或いはイトコであることもあり、夫

婦の場合もある。いずれにしても、ハワイの二重主権は安定を欠き、二人の王の争いとなり、活動的な王が片方の王を追放し、或いは倒すという過程が繰り返される。ところが、同じポリネシアでも、トンガ島の二重主権は相補的な関係にあり、安定したものである [Valeri 1985：80-94；1990：55-56]。

サーリンズは、ハワイやフィジーの二重主権を侵略者である異人王の暴力の原理と、生産的な平和の原理として捉えた [Sahlins 1985 第3章]。ミクロネシアのポナペ島は五つの地区に分かれており、各地区には王族の血を引く、ナンマルキという称号とナンケンという母系的に受け継がれる称号を持つ二人の首長がいる。これも一種の二重主権と言えよう [Riesenberg 1968：33-50；Alkire 1977：60-63]。

ここで注目したいのは、二重主権はオーストロネシア語族に限られているわけではないという点である。古代インド・ヨーロッパ語族に王権の二分制（それに関する觀念形態 [idéologie]）が広く見られることがデュメジルによって明らかにされている。デュメジルは、古代インドの神話に見られる二重主権について、一方のヴァルナは攻撃的で神秘的な力に動かされ、荒々しく、恐ろしい戦士の側面における至上神であり、他方のミトラは理性的で、規則を重んじ、温和で慈悲深い祭司的側面において至上神であると述べ、この至上神の2側面は、ローマ神話におけるロムルスとヌマに対応すると論じた。ロムルスは若者で、征服者であり、好戦的で暴力を駆使し、呪術的であるのに対し、ヌマは老人で、厳格で、祭祀を創り、敬虔で、宗教的であるとする [Dumezil 1948]⁹⁾。

ニーダムは、ケニアのバントゥー語系のメル族において、現実の世界を統治する司法者としての「長老」と、儀礼を司る最高

祭司「ムグウェ」を分析し、メル族の「長老」は、古代インド＝ヨーロッパ語族の至上権におけるミトラに当り、「ムグウェ」はヴァルナに当ると述べている [Needham 1960]。さらにリュック・ド・ウーシュは同じバントゥー語系のルバ王国その他の神話を構造主義的方法で分析し、暴力的で、残忍な、インセストを犯す王と、ルールを重んじ、平和を求める温和な王が対比されていることを指摘し、彼らの観念体系における構造的な論理（ロジック）を明らかにしようとしている [Heusch 1968；1982]。これは、現代におけるアフリカなどの神聖王の衰退に伴う政治組織の変容を「迷信からロジックへ」と述べた、現代の人類学者と思われぬフィーレイ＝ハーニック [Feeley-Harnik 1985；307] の正に西洋中心的な見解を想起させる⁹⁾。

以上見たように二重主権 (diarchy; dual kingship; dual sovereignty) はオーストロネシア語族に限らず、世界各地に見られることが明らかである。つまりそれはオーストロネシア語族のみの特色ではないということである。ポリネシア文化の研究においても、ポリネシアの世界から一層広いマラヨ＝ポリネシア (オーストロネシア) の世界を視野にいれた (比較) 研究が必要なことをマークスが指摘している通りである [Marcus 1989；186]。二重主権制は沖縄や奄美においても行なわれていた [鳥越 1944；松山 1970；吉田 1983]。上述のような語族を越えた広範囲な類似性があるからといって、これらが普遍的であるとは思われぬ。類似性の解釈については種々の論議があり、これは改めて取上げねばならない課題の一つである。

注

パソコンの活用について教えていただいている浜本満氏に感謝の意を表したい。

- 1) 九州大学教育学部平塚益徳教授のお招きによる。
- 2) 東京大学教養学部教養学科に文化人類学の分科課程が設置されたのは1954年である (『駒場の50年』[駒場50年史編集委員会]、2001年による)。
- 3) ムチャリン神に関する資料は、筆者の調査資料と Lovric 1987年などによる。
- 4) バリ島民の暦については、吉田編著、1998：136-144を参照されたい。
- 5) ギアツは“sakti”を“sekti”と書いているが [Geertz 1980；105]、これは間違いである。バリ語辞書類 (例えば Kersten BVD 1984) や Hobart 1985, Barth 1993, Wikan 1990なども sakti としており、私も現地を確認した。
- 6) デュルケムは、最も原初的な宗教としてのトーテミズムの根源に非人格的な力として「マナ」を想定した。デュルケムよりいっそう民族誌に依拠しているモースは主に Skeat [1900] を基にして kramat を述べている。マレー地方の kramat については Endicott [1970] が新しいデータを用いて詳述している。
- 7) オーストロネシア語族は、西はマダガスカル島、東はイースター島、北は台湾、南はニュージーランドを囲む住民の言語の総称である。マラヨ＝ポリネシア語族とも言われる。ただオーストラリア先住民の現地語、ニューギニア内陸部などこれに含まれない。オーストロネシア語族はさらに、セレベス島、フィリピン、バリ島、ジャワ島などの言語を含むヘスペロネシア語派、メラネシア語派、ポリネシア後派に分かれる [崎山 1987]。
- 8) デュメジルは、古代インド＝ヨーロッパ語族の観念には3区分、3機能 (統治、武力、生産) があることを明らかにした。彼は、当初はこれを社会的な3階層として捉えたが、後に3機能はむしろ表象、世界観

であり、これを観念形態 (idéologie) として捉えるようになった [Dumézil 1958 ; 1986]。ミトラ=ヴァルナのような統治の2分制も、同じように表象として捉えられている [1948]。この点は現在でもしばしば誤解されている。

- 9) これは、呪術を因果関係の誤認としたフレイザーと同じ発想である。そこには、西洋=ロジック、合理性、神聖王=迷信、非合理性という図式があるように思われる。語るに落ちたということか。(吉田2002参照)。

引用文献

- Alkire, W. H. 1977(1972). *An Introduction to the People and Cultures of Micronesia*. Menlo Park: Cummings.
- Anderson, Benedict R. O'. G. 1972. 'The Idea of Power in Javanese Culture'. C. Holt (ed.), *Culture and Politics in Indonesia*. Ithaca: Cornell University Press.
- Allen, N. J. 2000. 'The Field and the Desk: Choices and Linkages'. Dresch, P., W. Ja, es and D. Parkin (eds.). *Anthropologists in the Wider World*. Oxford: Bergham.
- Barber, C. C. 1979. *Balinese-English Dictionary*. Aberden: Aberden University Library.
- Barth, F. 1993. *Balinese Worlds*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- Boon, J. A. 1977. *The Anthropological Romance of Bali*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Codrington, R. H. 1891(1972). *The Melanesians: Studies in Their Anthropology and Their Folklore*. Oxford: The Clarendon Press.
- Cunningam, C. E. 1965. 'Order and Change in an Atony Diarchy'. *Southwestern Journal of Anthropology*. Vol. 21, 4 : 359-382.
- Duff-Cooper, A. 1988. 'The Formation of Balinese Ideology in Western Lombok'. 三田哲学会、『哲学』86集、pp.151-198。
- Dumézil, G. 1948. *Mitra-Varuna: essai sur deux représentations indo-européennes de la souveraineté*. Paris : Gallimard. (中村忠男訳「ミトラ=ヴァルナ」『デュメジル・コレクション』(丸山静、前田耕作編)ちくま学芸文庫、2001年)。
- Dumézil, G. 1958. *L'idéologie tripartite des Indo-Européens*. (松村一男訳『神々の構造』国文社、1987)。
- Dumézil, G. 1977(1986). *Les dieux souverains des Indo-Européens*. Paris : Gallimard.
- Endicott, K. M. 1970. *An Analysis of Malay Magic*. Oxford: The Clarendon Press.
- Feeley-Harnik, G. 1985. 'Issues in Divine Kingship'. B. J. Siegel, A. Beals, S. A. Tyler (eds.) *Annual Review of Anthropology*, Vol. 14 : 273-313. Palo Alto: Annual Reviews.
- Fortes, M. 1983. *Oedipus and Job in West African Religion*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Fournier, M. 1994. *Marcel Mauss*. Paris: Gallimard.
- Goldman, I. 1970. *Ancient Polynesian Society*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- Geertz, C. 1980. *Negara: The Theatre State in Nineteenth-Century Bali*. Princeton: Princeton Univ. Press. (小泉潤二訳『ヌガラ—19世紀バリの劇場国家—』みすず書房、1990年)。
- Geertz, H. 1991. 'A Theatrical Cruelty: The Contexts of a topeng performances'. H. Geertz (ed.) *State and Society in Bali*
- Guérmonprez, Jean-François. 1987. *Les Pandé de Bali*. Paris École Française d'

- Extrême-Orient.
- Heusch, Luc de. 1982. *The Drunken King, or the Origin of the State*. Bloomington: Indiana Univ. Press.
- Heusch, Luc de. *Rois nés d'un coeur de vache*. Paris: Gallimard.
- Hobart, M. 1985. 'Is God Evil'. D. Parkin (ed.), *The Anthropology of Evil*. Oxford: Blackwell.
- Hocart, A. M. 1969 (1927). *Kingship*. Oxford: Oxford Univ. Press. (橋本和也訳『王権』人文書院)。
- Hocart, A. M. 1970 (1936). *Kings and Counsellors: An Essay in the Comparative Anatomy of Human Society*. Chicago Univ. of Chicago Press.
- Keesing, R. 1984. 'Rethinking Mana', *Journal of Anthropological Research* 40(1) : 137-156.
- Koentjaraningrat. *Manusia dan Kebudayaan di Indonesia*. Djakarta: Djabatan. (加藤剛、土屋健治、白石隆訳、『インドネシアの諸民族と文化』めこん、1980)。
- 桑山敬己 2001「アメリカの文化人類学教科書の内容分析」『国立民族学博物館研究報告』25(3) : 355~384。
- Lovric, B. 1987. 'Bali: Myth, Magic and Morbidity', Owen, N.G.(ed.), *Death and Disease in Southeast Asia: Explorations in Social, Medical and Demographic History*. Oxford Oxford Univ. Press.
- 松山光秀。1970。「共同体の構造」徳乃島町編纂委員会『徳之島町誌』pp.458-491。
- Marcus, G. E. 1989. 'Chieftainship'. Howard, A. & R. Borofsky (eds.) *Development in Polynesian Ethnology*. Honolulu: Univ. of Hawaii Press. pp.175~209.
- Mauss, M. 1950 (1999). *Sociologie et anthropologie*. Paris: Presses Universitaire de France.
- Needham, R. 1962. *Structure and Sentiment*. Chicago: Univ. of Chicago Press. (三上暁子訳『構造と感情』弘文堂、1977年)。
- Needham, R. 1960. 'Left-Hand of the Mugwe: An Analytical Note on the Structure of Meru Symbolism'. *Africa*, 30 : 20-33.
- Riesenberg, S. H. 1968. *The Native Polity of Ponape*. Washington, D.C.: Smithsonian Contribution to Anthropology. Vol. 10.
- Sahlins, M. 1985. *Islands of History*. Chicago: Univ. of Chicago Press. (山本真鳥訳『歴史の島々』法政大学出版会、1993年)。
- 崎山理 1987「オーストロネシア語族」『文化人類学辞典』(石川栄吉ほか編) 弘文堂。
- Schärer, H. 1963. *Ngaju Religion*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Schultz, E. A. & R. H. Lavenda. *Cultural Anthropology: A Perspective on the Human Condition*. 3rd Edition. Mountain View: Mayfield.
- Schirokogoroff, S. M. 1935. *Psychomental Complex of the Tungus*. London Kegan Paul.
- Shore, B. 1985. 'Mana and Tapu'. Howard, A. & R. Borofsky (eds.), *Op. Cit.*
- Swellengrebel, J. L. 1984 (1960) 'Introduction', Royal Tropical Institute, *Bali: Studies in Life, Thought and Ritual*.
- 鳥越憲三郎 1984『琉球古代社会の研究—政治と宗教—』三笠書房。
- Stohr, W. & Piet Zoetmulder. *Les religions d'Indonesie*. (Tr.L.Jospin). Paris: Payot. (*Die Religionen Indonesiens*. Stuttgart: Kohlhammer Verlag.)
- Valeri, V. 1980. *Kingship and Sacrifice*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- Valeri, V. 1990. 'Diarchy and History in

- Hawaii and Tonga'. Siikala, J. *Culture and History in the Pacific*. Helsinki: The Finnish Anthropological Society.
- Vickers, A. 1991. 'Ritual Written: The Song of the Ligya or the Killing of the Rhinoceros'. H.Geertz (ed.), *Op. Cit.*
- Wallis, R. J. 2002. 'The *Bwili* or "Flying" Tricksters of Malakuta: A Critical Discussion of Recent Debates on Rock Art, Ethnography and Shamanism'. *The Journal of Royal Anthropological Institute*. 8 : 735-760.
- Wikan, U. 1990. *Managing Turbulent Hearts: A Balinese Formula for Living*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- 吉田禎吾 1983.「コスモロジーに関する象徴論的覚書—奄美諸島の民俗観念を中心として—」。『東京大学教養学部教養学科紀要』15 : 1~21。
- 吉田禎吾編著 1996 『バリ島民』弘文堂
- 吉田光宏 2002 「異文化相互理解の動態的プロセス——日本社会の文化分析のための外側からの視点——」『神田外語大学 日本研究所紀要』2002年3月号 : 20-47。